

はんまーはんむ

はんまはし 演廻 (名) はまなげ
はんまん 斑慢 (名) まだらま(斑)
はんまんとる (名) はんまんとる

はんめ

はんめい 判命 (名) 藩主又は藩廳
はんめい 判明 (名) はっきりとわかること
はんめい 判然 (名) 判然として明瞭なること

はんも

はんめんつう 一面痛 (名) 前條に
はんも 繁茂 (名) 草木などの生
はんも 反目 (名) 目を反(めて)らみ

はんや

はんものくさ 半物草 (名) しりき
はんものひき 半股引 (名) 丈短く
はんものうら 半模様 (名) 衣服の腰

はんやーはんや

はんや 木綿 (名) 植木綿料、木綿屬
はんや 番屋株 (名) 江戸時代
はんや 番屋 (名) 番人の詰所

はんら

はんら 煩勞 (名) 心をわづらはし身を
はんら 汎濫 (名) 水のみなき

はんり

はんり 一里の半分
はんり 一盤 (名) 大賣合の制

はんり

はんりやう 一盤 (名) 大賣合の制
はんりやう 一盤 (名) 大賣合の制

はんり

はんりよう 一 蟠龍 (名) 地にわたかま... はんりようしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名) 唐樂の黄鐘調の一... はんりようしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名) 唐樂の黄鐘調の一...

はんれ

はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい...

はんろ

はんれう 一 汎龍舟 汎龍舟 (名) はんれうしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名) はんれうしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名)...

はんれ

はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名)...



はんりん 一 半輪 (名) 一輪の半分... はんりん 一 半輪 (名) 一輪の半分... はんりん 一 半輪 (名) 一輪の半分...

はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい はんれい 一 判例 (名) はんれいつれい...

はんれう 一 汎龍舟 汎龍舟 (名) はんれうしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名) はんれうしめ 汎龍舟 汎龍舟 (名)...

はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名) はんれん 一 版位 (名)...

と、又、其の所。
ひつて (名) ひきて(引手)に同じ。くつ(引手)を見よ。甲陽軍鑑「引手、左の方を水つき、右の方をひつてといふなり」
ひつて 一匹敵 (名) たぐふこと。肩をならぶこと。相手。魏志「引手、自當與御門戸一匹敵者」
ひつて (名) 空虚なること。皆無なること。浮世床「ひつてんな所ばかりは會我だ」
ひつてん (名) 少許の水を入れたる筆に墨を含ませしむるに先だち、其の中ひたして筆先を柔るるに用ふる器具。米庵「筆は墨を少許入れ、筆先を柔るるに用ふる器具」
ひつてん (名) 筆筒 (名) 筆をいれる筒。ふたでたて。致遠雜俎「有斑竹筆筒、名表鏡」
ひつてん (名) 筆頭 (名) 筆の先。徐氏筆精「運歩色筆、筆頭」
ひつてん (名) 筆頭 (名) 筆の先。徐氏筆精「運歩色筆、筆頭」
ひつてん (名) 筆頭 (名) 筆の先。徐氏筆精「運歩色筆、筆頭」

左へひの通れば、驚鹿が垂れてある」
ひつとらふ (名) 引捕 (他動) 「ひきとらふ(引捕)の音便」
ひつとり (名) 一人 (名) ひとり(一人)の音便。心中宵庚申「氣轉のきいたがひつとりもない」
ひつな 緋綱 (名) 神輿の四角に張りて鈴を附けたる綱。
ひつなます 氷頭輪 (名) 氷頭を細かく刻みてなますとしたるもの。
ひつは 一匹馬 (名) 一匹の馬。又、馬。太平記「西馬風に嘶えて、正馬蹄を勢せしかば」
ひつがす 引割 (他動) ひきはがす引割の音便。
ひつがす 引割 (他動) ひきはがす引割の音便。
ひつがす 引割 (他動) ひきはがす引割の音便。

ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

るは今の事「因女を挑む。因後れしむ。延引せしむ。のばす。離摩歌「入相時分に膳立して、夕飯、夜食を引つ張り」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」
ひつば (名) 引外 (他動) 「ひきはがす引外の音便」

かなしき調子。 (名) ひびやう(非上)に同じ。

【批摘】 抽出して批評すること。

【美的】 物ごとの美なるにふさわしい。

【美的快感】 (英) Aesthetic pleasure) 【哲】 美的の對象により惹起せらるる快感。

【美的觀念】 美に關して起る觀念。

【美的生活】 美を人生の中心として満足を得んとする生活。

【秀衡小判】 (名) 秀衡が所造と、疑ふらくは臆説ならん。

【秀衡】 (名) 秀衡が所造と、疑ふらくは臆説ならん。

【秀衡】 (名) 秀衡が所造と、疑ふらくは臆説ならん。

【秀衡】 (名) 秀衡が所造と、疑ふらくは臆説ならん。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

【日照】 (名) 日照ること。

しき垣根に咲き待りけり」同書なみな
 みの人めきて、ここのさまや」
ひとめぐり 一周 (名) 一度めぐ
 ること。①一周忌。一回忌。續千載馬
 まかりて、長月の頃ひとめぐりに當たり
 侍りけるに、新千載馬ひとめぐりの法
 事の目」
ひとめせきゆ 火止石油 (名) 【化】
 分溜法によりて揮發性引火し易き部分を
 除き、硫酸・苛性ソーダ・水等にて洗滌精
 製し、不純物を除き、燈用に供せらるる石
 油。比重〇・八、引火點四五度以上なるを
 良しとす。
ひとめづつみ 人目包 (名) 人目を
 つつむこと。和歌には多くつつみを堤に
 よせてよむ。陸信集「朽ちてはてたを
 も橋は渡るとも、人めづつみに猶やせか
 れん」同一、涙川人めづつみをせきかね
 て、もらすに知れ深き心は」
ひとめんたう 人面倒 (名) 他人の
 面倒を見ること。人の世話。
ひとも 人面 (名) 古昔、伊勢大神宮
 の神衣祭に、男子にて神衣を供進するも
 の。大神宮諸事記「神部・人面等、年
 奉持神御衣等」神名記書「神衣祭者、皇
 大神宮御坐高天原之昔、人面等之遺祖天
 千千姫、殖桑葉於香山、以所置之御絲
 織、供進御衣於大神、御垂跡之刻、彼神連
 奉、載兩具御機具、天降御座之以降、人面
 職掌人等、爲其末葉、以女子者、織織子、
 以男子稱、人面職掌不違天宮之例、以
 四九兩月十四日、職掌」
ひともし 火點 (名) 送葬の時、炬火
 を持ちて前行する者。榮華月御さきに
 火ともしばかりにて」
ひともし 一文字 (名) 一文字の文
 字。一字。土佐日記「一文字を知らぬも
 のしが」宇津保傳「ひともしをだに聞か
 せ給はぬ」【植】ねき青葱をいふ、女
 詞。
ひともしいし 火點石 (名) 手水鉢
 のそばに立つる石燈籠に火をともし時の
 足掛りに据ゑ附くる石。後には燈籠の臺
 石の側に据ゑ附くる石の稱。
ひともしも 火點蜘蛛 (名) 【動】
 常の蜘蛛に似たれども、山中樹間に網を
 結び、葉を隠れざるもの。花蜘蛛。【註】
ひともしどき 火點時 (名) ひとと
 しどき(火點時)に同じ。榮華月御さきひと
 し時になりぬ」
ひともしひと 火點人 (名) 燭を執
 りて待てる人。景行紀(乘燭者)に同じ。
ひともしと 火點 (名) 【植】ひきおこしの
 異名。
ひともしすすき (名) 【植】禾本科、ひと
 もとすすき屬の多年生草本。入なるもの
 は高さ六尺内外に達す。葉は細長くて平
 行脈を有し、互生して三稜列に排列す。
 花は淡褐色を呈して小穂狀花序に排列
 し、また多く集まりて繖房花序を作る。
ひともしやなぎ 一本柳 (名) 一本
 はなれて生ひ立てる柳。現六帖道の「
 のもと柳ふして膝き、おきて亂るる春
 風ぞ吹く」堀河百首書わが宿の一本柳春
 くれば、吹きまくる風にかつ亂れけり」
ひともしもの 一物 (名) 器物に十分
 満ちたるにいふ語。ひともの。一杯。今
 昔話大きな壺の有りけるに、水を一物
 入れて、宇治拾遺「内供の類に、壺の類
 にも、粥とばしりてひと物かかぬ」
ひともしん 一文 (名) 錢一文の廣さ。
 聖徳宗五大雙紐はひとものとて、昔よ
 り定まりたる事に候を、殊の外今は廣
 く候」
ひともしや 人屋 (名) 罪人を捕へて押し
 籠めおく家。牢屋。獄屋。囚獄。神

功起(園園)と和名(獄獄)宇治拾遺
 「いみじき悪人にて、人屋に七度ぞ入りけ
 る」
ひとやど 人宿 (名) 人を宿せし
 むるところ。モトヤ。旅宿。はたごや。
 室町千疊敷此の邊に人宿を致す者なれ
 ども」享保集徳川綱吉御時、人宿又者
 牛馬宿一徳川集考後、後、人宿之
 儀に付御觸書」【屋】人の口入れやど。
ひとやどり 人宿 (名) 人の宿る處。
 宿泊所。砂石集、坂本の人宿りの地蔵堂
 の柱に「盛衰記世六無、小峠坂の人宿り
 に、人あまた香しけり」
ひとやのかみ 囚獄正 (名) 囚獄司
 の長官。職員令、正六位、因獄正(正)
ひとやのつかさ 囚獄司 (名) しつ
 ぐくし(囚獄司)に同じ。和名、囚獄司(正)
ひとやのつかさのかみ 囚獄正 (名)
 囚獄司の長官。
ひとやのつかさのさかん 囚獄令史
 (名) 囚獄司の主典。
ひとやのつかさのじょう 囚獄佑
 (名) 囚獄司の判官。
ひとやま 人山 (名) 群衆の密集せる
 さまを形容するにいふ語。人の山。
ひとやま 一山 (名) 山全體。山ち
 ゅら。満山。宇津保傳、虎狼ひと山さ
 わぐ所あり」宇治拾遺、ひと山を尋ねあ
 りけども、つひに在所なし」【果物】野菜
 など、積み重ねたる一かたまり。
ひとやま 一山百文 多くして價なきものに
 ぶ。
ひとやがり 人屋破 (名) らうや
 ぶり(半破)に同じ。
ひとやり 人遣 (名) 他より爲さし
 むること。我が心よりするに非ずして、
 他より餘儀なくせらるること。古今類
 「八やりの道ならなく大方はいきうし
 といひていざ歸りこん」【人】人を行かしむ
 ること。新六帖、月影はまた夜ふかしと
 やすらば、はややりの鳥はなくなり」
ひとやり ならず 非人遣、他よりする
 わざに非ず。わが心からなり。源朝
 「折り折り、八やりならぬ胸こがる夕
 もあらんと思ひ侍る」同、夕、八やりな
 らず、心づくしにおもほし亂るること
 ども」
ひとゆき 人行 (名) ひとどほり(人
 遣)に同じ。
ひとよ 一夜 (名) ひととばん。充恭
 紀「ささらがた錦の紐を解ききけて、あま
 たは寝ずとた比等用(命)のみ」萬葉
 ぎもこがいに思へか、ねばたまの比登
 欲(命)もおちずいめにし見ゆる」【ある
 夜】あるばし。源朝、一夜の深山風に過
 ち給へる悩ましきなり」
ひとよのあき 一夜秋 秋立ちて一
 夜。秋の一夜。玉葉集、草の葉に一夜
 の秋を吹きこして、けふより涼し池の
 夕風」
ひとよのまつ 一夜松 ひとよまつ
 (一夜松)に同じ。風雅集、思ひ初めし
 一夜の松の種しあれば、神の宮居も千
 世や重ねん」
ひとよ 一世 (名) 一生。同じ生
 涯。萬葉「一世」には二たび見えぬ父母
 を、おきてや長くあが別かれなむ」
ひとよきり 一節切 (名) 尺八に似
 て細く、長さ四尺にて一尺八分の笛。
 竹の一節にて作るよりいふ。二代男、一
 節切の連れ吹き。人倫訓蒙圖、一節
 切尺八より作り出だすものなり」和漢
 三才圖會、一節切(竹)一節切(尺八)一
 而短、其長一尺八分、止一節故名之」一
 節切竹律談、皇國において一節切の



笛の創まるや、太古神代天領女命、天の香
 久山の竹をとりて、節間に孔を盛りて和
 氣を通じ給ひしよりと云ひ傳ふ」
ひとよきり のしやくはち 一節切尺八
 ひとよきり(一節切)に同じ。一節切竹
 律談、皇古より一節切の尺八とい
 ひなし、今は一節切と呼びて、尺八とい
 はす」
ひとよきり 一節切尺八 (名) 前條に同じ。絲竹初集、一節切
 尺八切りやらの事、節を一つこめ、長さ一
 尺八分に切る故此の名を付くるといふ、
 節より下は七寸、上は三寸八分に切る也」
ひとよきり 一節切節 (名) 文
 祿・慶長の頃より元祿・寶永の頃流行せる
 一節切に合せて唱ひたる小唄。
ひとよきり 一夜草 (名) 【植】すみ
 れ(葦)の異名。藏玉「一夜草。葦。一夜
 草ゆめまましつ古の、花と思へば今
 も摘むらん」
ひとよきり 人除 (名) 人の入るを防ぐ
 爲めに設くるもの。一代男「しのべ竹の
 人除け」
ひとよきり 一夜 (名) ひとよ(一夜)に
 同じ。藤門松「よさの傾城代」井筒業
 平河内通「君と寝初めてよさも」
ひとよきり 一夜酒 (名) 【一夜の酒
 に熱するよりいふ】あまやけ。こよやけ。
 東宮年中行事「さげづかさ、ひとよきり
 けを奉る」公事根源「酒、一夜ざけと
 は、けふつくれば明日に供するなり、一夜
 を隔つる竹葉の酒なれば一夜酒と申すな
 り」多識編「體言考、又、
ひとよきり 人好 (名) 餘り温順にすぎ
 て侮られ易きこと。又、その人。好人物。
 おひとよし。
ひとよきり 一夜鮎 (名) はやずし
 (早鮎)に同じ。

風上より敵船に火をかくるもの。
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

東大寺要録に奈良山太上天皇山陵碑文
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

もの。四月より九月頃まで、晴れの場合に
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

而乾、此稱「種草」
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病
ひばりやう 皮膚病 (名) 皮膚病

余楮之用也、古人用兵、其疾如風、亦然乎、若推擴言之、則貴介公子、學之以帥兵、庶幾君子之風、小人之草、故改則正流、始號風傳流。

ふうどー 風土 (名) 其の地の氣候地味など。運歩色葉「風土」後漢書「帝嘗召見諸郡計吏、問其風土及前後令詔否」後漢書「嘗謂許都之子之風度、雖經國之術、無足多談、而進退之禮、良可信矣」風力の程度。

ふうどー 封筒 (名) じやうばこ (封筒)に同じ。じやうばこ (封筒)に同じ。尺牘彙材「封筒」上の袋を封筒と云ふ。

ふうどー 風燈 (名) ふうぜん (風前)もしび (風前)に同じ。ふうぜん (風前)の條を見よ。遺史「風燈、人生如風燈、石火、不飲將何爲」。

ふうどー 風燈 (名) 風の吹き當たる石階。太平記「風燈」に風燈を登れば、竹筥に甘露を分けて、石階に茶の湯を立て置きたり。杜市時、風燈吹、陰雲、雲門吼、瀑泉。

ふうどー ふうどー (名) 植物科、胡椒の莖生常緑植物。莖は積木質をなす。葉は長卵形にして失り、或ひは心臟形を呈す。花は單性、花被を缺き、何れも長き穂状花序に排列す。葉用に供す。我が國、暖地に自生す。きんま。つるこせう。

ふうどー 風毒 (名) ふうしつ (風濕)に同じ。

ふうどー 風土病 (名) 土地氣候等によりて、其の地方に起る病。御用留「北蝦夷地風土病之儀、御評議」。

ふうどー 風難 (名) 風強く吹くに由りて蒙る災禍。風のわざはひ。運歩色葉「風難」。

ふうば 風波 (名) かせと名みと。風立ちて波荒きこと。なみかせ。風濤。諸事ある時は舟に浮かび、風波に身を任せ。風原文「風波」以て「流分」。

ふうば 風馬 (名) ふうばう (風馬) 馬牛の略。太平記「山門」南北境、風馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。

ふうば 風媒花 (名) 植物學上の語。雄蕊の花粉が、風の爲めに雌蕊の柱頭に送られて生殖作用を営む花。概ね自立たぬ花にして、松竹、稻など其の例なり。

ふうば 風媒植物 (名) 植物學上の語。雄蕊の花粉が、風の爲めに雌蕊の柱頭に送られて生殖作用を営む花。概ね自立たぬ花にして、松竹、稻など其の例なり。

ふうば 風砲 (名) 火薬・火繩などを用ひず、空氣の作用によりて發射する小銃。今の空氣銃の如きもの。下文を見よ。武江年表「鐵砲、鐵砲治國、兵衛當といふ人、中風力の力を以て放つての鐵砲に、新意を加へ工夫をこらし、風砲又ハ氣砲と號して製しはじむ」。

ふうば 風貌 (名) 容貌・風采。齊魯「四人並以風貌、王城、謝莊爲一雙、謝莊、何儀爲一雙」北夢瑣言「初學、進士風貌不揚」。

ふうば 風手 (名) ふう (手)は豐滿の貌。一説、美好の義。うらはしき風采・容顏。

ふうば 風馬牛 (名) ふう (馬)は放の義。馬又は牛の牝牡相慕ひて放逸すれども、兩地遠隔して互ひに會するを得ざること。雙方の土地の遠隔せること。左傳「君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也、不虞君之涉吾地也」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうぶ 風病 (名) かせのやま (風病)に同じ。著聞「こと風病おもき人にて、笛のつかにも紙をまきてぞ使はれける」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうどー 風土 (名) 其の地の氣候地味など。運歩色葉「風土」後漢書「帝嘗召見諸郡計吏、問其風土及前後令詔否」後漢書「嘗謂許都之子之風度、雖經國之術、無足多談、而進退之禮、良可信矣」風力の程度。

ふうどー 封筒 (名) じやうばこ (封筒)に同じ。じやうばこ (封筒)に同じ。尺牘彙材「封筒」上の袋を封筒と云ふ。

ふうどー 風燈 (名) ふうぜん (風前)もしび (風前)に同じ。ふうぜん (風前)の條を見よ。遺史「風燈、人生如風燈、石火、不飲將何爲」。

ふうどー 風燈 (名) 風の吹き當たる石階。太平記「風燈」に風燈を登れば、竹筥に甘露を分けて、石階に茶の湯を立て置きたり。杜市時、風燈吹、陰雲、雲門吼、瀑泉。

ふうどー ふうどー (名) 植物科、胡椒の莖生常緑植物。莖は積木質をなす。葉は長卵形にして失り、或ひは心臟形を呈す。花は單性、花被を缺き、何れも長き穂状花序に排列す。葉用に供す。我が國、暖地に自生す。きんま。つるこせう。

ふうどー 風毒 (名) ふうしつ (風濕)に同じ。

ふうどー 風土病 (名) 土地氣候等によりて、其の地方に起る病。御用留「北蝦夷地風土病之儀、御評議」。

ふうどー 風難 (名) 風強く吹くに由りて蒙る災禍。風のわざはひ。運歩色葉「風難」。

ふうば 風波 (名) かせと名みと。風立ちて波荒きこと。なみかせ。風濤。諸事ある時は舟に浮かび、風波に身を任せ。風原文「風波」以て「流分」。

ふうば 風馬 (名) ふうばう (風馬) 馬牛の略。太平記「山門」南北境、風馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。馬の蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。

ふうば 風媒花 (名) 植物學上の語。雄蕊の花粉が、風の爲めに雌蕊の柱頭に送られて生殖作用を営む花。概ね自立たぬ花にして、松竹、稻など其の例なり。

ふうば 風媒植物 (名) 植物學上の語。雄蕊の花粉が、風の爲めに雌蕊の柱頭に送られて生殖作用を営む花。概ね自立たぬ花にして、松竹、稻など其の例なり。

ふうば 風砲 (名) 火薬・火繩などを用ひず、空氣の作用によりて發射する小銃。今の空氣銃の如きもの。下文を見よ。武江年表「鐵砲、鐵砲治國、兵衛當といふ人、中風力の力を以て放つての鐵砲に、新意を加へ工夫をこらし、風砲又ハ氣砲と號して製しはじむ」。

ふうば 風貌 (名) 容貌・風采。齊魯「四人並以風貌、王城、謝莊爲一雙、謝莊、何儀爲一雙」北夢瑣言「初學、進士風貌不揚」。

ふうば 風手 (名) ふう (手)は豐滿の貌。一説、美好の義。うらはしき風采・容顏。

ふうば 風馬牛 (名) ふう (馬)は放の義。馬又は牛の牝牡相慕ひて放逸すれども、兩地遠隔して互ひに會するを得ざること。雙方の土地の遠隔せること。左傳「君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也、不虞君之涉吾地也」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうば 風伯 (名) 風の神。太平記「風伯、雨師、道を清め、風伯塵を拂ふ」。

ふうぶ 風病 (名) かせのやま (風病)に同じ。著聞「こと風病おもき人にて、笛のつかにも紙をまきてぞ使はれける」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

ふうぶ 夫婦 (名) 夫と婦と。めうと。いもせ。つれあひ。十訓「夫婦の中をば君臣の道に譬へたり」。

